

# 生徒を触発する環境作りに努力

## 自律プロジェクトで共有・蓄積・継承

北海道札幌北高等学校 奥村稔教諭（前・北海道旭川凌雲高等学校）

### <プロジェクト以前>

初任校である名寄農業高校の生徒が、営農管理にコンピュータを使う姿を見て興味を持ち、自費でPC-9801を購入したのがコンピュータとの出会いです。その後、旭川凌雲高校に転任しました。当初は新設校であったにもかかわらず校舎は間借り状態であったので、その分、本来建物に投資する予算をコンピュータなどに少々回すことができました。教職員の理解があったことも幸運でした。

### 実践の経過、教訓

#### 「絶対に参加したい」

100校プロジェクトに応募する直接のきっかけは、稚内北星学園大学(現在)におけるUNIXやネットワーク管理などに関するサマースクールで、宮澤先生(現・早稲田大学IT教育研究所)から100校プロジェクトの計画を伺ったことです。学校でのコンピュータの活用を進める中で、旭川凌雲高校には「情報システム部」という校務分掌が早い段階で創設されていましたが、そうした組織があったことも、学校を挙げての応募を後押ししました。



100校プロジェクトの募集期間は短かったのですが、関連情報を注意深くウォッチしていたことで、幾分かは余裕を持って提案書を書くことができました。コミュニケーションやコミュニティというキーワードを盛り込んで応募した記憶があります。

#### 生徒のための学習環境とは？

当時、インターネットやコンピュータは「道具」という考え方をされ始めていましたが、私は「学習環境」とであると捉えていました。メーリングリストなどを使って、学校の枠を超えたところで生徒たちが意見交換することにより、広い意味での学習意欲を互いに触発するのではないかと考えていたのです。こうした考えが後に、「自律プロジェクト」として発展していきました。

#### ・第1期

旭川凌雲高校をはじめ8校が参加しました。当初は、メーリングリストで「生徒たちの自己組織化ができるのではないかと」という仮説を立て実践しましたが、環境を与えたそのままの状態では、学習環境としては不十分であることが分かりました。「自律の種蒔き」が必要であると実感されました。

#### ・第2期

共通テーマの下で日常的に活動することは、あまりにも負担が大きいものです。一過性のイベントではなく、「社会的分散認知」としての学習環境を求めるために発想を転換しました。「各地域での独自の取り組み」「互いの実践の『過程』を共有する」というものです。このことが功を奏し、徐々に「地域分散・広域統合」という考

### 自律プロジェクト「高校生メールニュース」

以下は、高校生がまとめて配信した「メールニュース」のある回の概要である。

「旭川凌雲高校では、新たに『サーバ管理プロジェクト(仮)』を本格的に開始しました。

2か月ほど前、イントラネットサーバとするために2台のパソコンへRed Hat Linux6・2をインストールしましたが、ネットワークカードをうまく認識させることが出来ずに冬休みを迎えてしまいました。(中略)

まずは、生徒向けのホームページを公開しました。特に設定を変えずに運用をはじめましたが、掲示板を設置しようとしたときにCGIが使えないことがわかりました。いろいろ原因を探っていますが、どのようにすればいいのかわからず悪戦苦闘しています(平成14年3月)。生徒の動きがリアルに伝わってくる。

<http://www.nextage.ne.jp/>

え方にまとまり始めました。また、活動プロセスを「共有・蓄積・継承」することが重要であるということ、生徒とともに認識したのもこの頃です。

・第3期

地域分散プロジェクトというのは、例えば、旭川市内のマルチメディア企業を訪問・取材し、結果をホームページに掲載するといったことを実施しました。一方、広域統合では、上記のような地域ごとの取り組みを、メーリングリストで意見交換、メールニュースで外部に配信、そしてホームページなどで広く社会に情報発信していったのです。



旭川で行われた「高校生の集い」

生徒が見事に問題解決

第3期以降の取り組みでは、米国、ネパール、台湾などの外国さえも「地域」としてとらえ、その上で「高校生の集い(オフライン・ミーティング)」を実施しました。言葉のハンディキャップがあっても、ICTやノンバーバル・コミュニケーション(身振りや手振りなど)によって問題を解決することができます。次のエピソードは、自律プロジェクトの効果の一例です。

<エピソード >

英語が得意でないA君が、米国で英語のプレゼンテーションをすることになった。学校では「A君に何ができるのか？」と懐疑的だったが、A君はICTを駆使して見事なプレゼンテーションを行い、米国の大学教授の質問にも英語で対応してみせた。資料の英語への翻訳はインターネットの翻訳サービスを使うなど、「どうすればよいかの術」を知っていた。

<エピソード >

「メールニュース」が滞ったため、どうすればよいかという議論が始まった。しかし、議論は堂々巡りに陥り、たまりかねた米国の女子生徒の指摘に日本の生徒は言葉をなくしてしまった。休憩の中で教師からのアドバイスもあったが、再開された会議でB君が名乗りをあげ、問題点をホワイトボードに図式化し整理したことで、議論は前に向かってスムーズに動き始めた。

自律プロジェクトその後

8年間の実践の中で時代が追いついたのか、教科「情報」が創設されました。「型にはまった学校の教育からいかに自由になるか」という想いから生まれた自律プロジェクトですが、ここでこの趣旨のカリキュラム化が可能になったと考え、平成14年度でその活動を発展的に解消することにしました。

現在、自律プロジェクトの次の形として、愛知県滝高校、沖縄尚学高校を交えた3校で、「Career Preparation (進路学習)」を理念の中心とした実践を進めています。

10年間を振り返って

「知的好奇心」がICT活用の原動力

まず、ICTの活用に関することについて学ぶことが楽しいから。次に、教育関係者をはじめ、地域や海外の人など、様々な人たちと意見交換や活動ができること。そして結果的にですが、高々8年間の実践ですが、その間に人並み以上の実践と経験をすることができたと思っています。内容の濃い生活を送り、充実感を得ています。

<成功の秘訣>

身近にパートナー

いくらネットワークといっても、身近にパートナーがいることほど心強いことはありません。ここに書かれた実践は、同僚であった早乙女浩子先生と工藤彩佳先生に支えられたものです。(感謝！)

まず、教師が楽しいことをやろう

教師が楽しくなければ、生徒も楽しいはずがありません。その上で、教育的な意味を考えていても良いのではないのでしょうか。ICTの活用が先にあってはならないと思います。

教師は生徒以上にICTの本質を知る

もちろん、技術的には生徒にかなわなくても良いのですが、ICTの本質は見失わないようにしたいものです。そのためには、見えないところでの教師の努力・勉強がこれまで以上に必要です。